

「能海寛の将来品」

タイトル	「能海寛の将来品」
著者名	隅田正三
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 26 号
ページ	61－74
発行年	2021.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年
5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東
谷村）浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶
応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思
を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教
徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山に
よる体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史
を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小
屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として
釈迦直伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出
す目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道の
ため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉
大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓
を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」
西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書
として永遠に伝う。

能海寛の将来品

能海寛研究会員 隅 田 正 三

能海寛は、明治31年11月12日神戸港を出港し、11月16日に上海へ上陸した。明治34年4月21日付、愛妻静子宛て最後の書簡を以て音信を断った。2年5ヶ月間に亙る中国大陆を巡礼探検中、高僧の遺徳を偲び巡拝、著名寺院を巡拝し、方丈と仏教問答を交し、寺暦・僧侶数・西藏經典の有無を調査記録に残した。

旅行中に3つの難問を解決しなければならなかった。「遊清三難編」(在重慶 能海寛稿)^{注1}に1.通貨 2.言語 3.交通 と記している。通貨について次のように記している。「10両を小銭に替えると100斤(50Kg)となり、一人漸くこれを持つ人足を召連れしないと旅は出来ない。銀魂と小銭のみ、紙幣は無い。」という。通貨のためのみで人と馬が必要ということである。※1斤は、中国では500g(日本は600g)に換算する。この稿では中国換算としている。

重慶銀1両は、上海銀で1両1銭3分。日本円換算で、1円50銭。小銭は1吊200文～300文。上海銀1両は、日本円換算で、1円36銭。他にも、メキシコ弗、湖北銀貨、香港銀貨、上海紙幣(上海のみ通用)と多様であった。

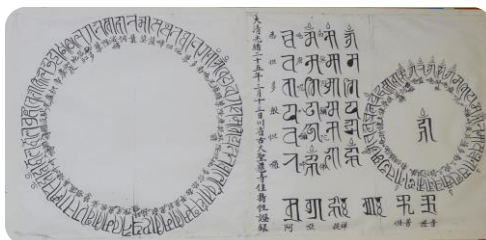
このような状況下で、限られた資金の中から取捨選択して仏典等の蒐集をおこなったのである。能海は仏典以外にも文化財的な洗眼力の高さにも敬服するものがある。

能海寛の将来した仏典・仏像・仏具・仏画等の蒐集の経緯と本国への輸送ルート、最終保存先等について能海寛の記録を基に検証してみたい。

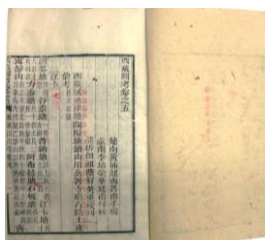
I 第一次探検行での蒐集品

上海—漢口—宜昌—巫山—夔州—重慶—昌隆—成都—嘉定—峨眉山—稚州—打箭炉—裏塘—巴塘—裏塘—打箭炉

「金剛經」(M31.11.26)を漢陽の帰光寺で入手。「地図」12巻(M31.11.28)。「草鞋」240文(M32.1.18)手帳5冊180文(M32.1.22)。「西藏図考」^{注2}ほか3部、15冊1,650文(M32.2.2)。「西藏地図」^{注3}完成(M32.2.28)。「銅盤子」3個円形直径2寸5分。内面銘「宣炆王大吉未」敷免に建武12年3月丙甲周儀造。顔色は緑にして古色を帯ぶ。質銅製(M32.3.9)。重慶府にて來迎仏「西藏仏」丈2寸7分の西藏伝来の観音の座像。銅製に金箔を置く(M32.3.9)。「西藏仏」古品2件4個、4両(5,000文)來迎仏と称す(M32.3.10)。四川省大聖慈寺見所有の証録より梵字を書写する。(M32.3.13)。重慶領事館で写真を撮る(M32.3.23)。游頭甫と2人でリッテル洋館にて記念写真を撮る。外にも従僕の彭春亭と3人での写真も撮る。写真代5枚で1,280文(M32.3.25)。



大聖慈寺見所有の証録



『西藏図考』



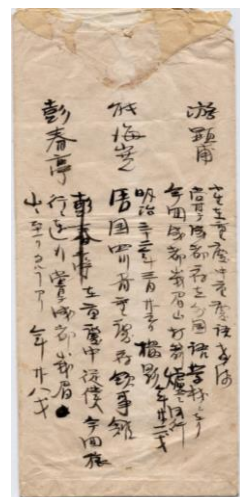
四川の草鞋2足

この3名で撮った写真は、甥の能海法恵がアルバムに貼付していたものを剥がして大谷大学、寺本婉雅氏へ送付している。註4

これまでに購入蒐集下品物を支那カバン、西洋カバンを一団として井戸川氏に托して本国へ幸便で送り返さることを約する。

※この内容が水野齊入宛書簡にも「重慶ニテ荷物支那カバン西洋カバン合シテ一個預ケ置キ幸便ニ日本へ送ル筈ニ致置候」(M32. 4. 14)と記されている

成都東門にて、「西藏仏」500文、「沿革図書」など2両(2,240文)購入(M32. 4. 12)。北門内の喇嘛古寺にて「蔵画」2幅1,000文、小さな「西藏仏」1,200文(M32. 4. 15)。「古釈迦仏」銅製丈7寸5分。西藏伝来の古仏。文殊門に詣で「仏像(文殊院)」2両2分(1,400文)蔵仏3鉢(950文)。昭覚寺にて「蔵仏」1両(1,200文)購入、方丈中恂より石摺数十葉(M32. 4. 16)をいただく。



能海寛、游顕甫、彭春亭3名写真説明文

蔵仏記 西藏伝来仏像画覚

- | | | | | | |
|------|----------|------------------------|-----------|--------|--------|
| 第1号 | 釈尊 | 銅黒 | 丈六寸 | 成都 | 500文 |
| 第2号 | 観音 | 銅黒 | 丈四寸 | 成都 | 360文 |
| 第3号 | 釈尊 | 銅泊附 | 丈三寸 | 成都 | 400文 |
| 第4号 | 観音 | 銅黒 | 丈二寸 | 成都 | 300文 |
| 第5号 | 三鉢 | 甲 釈尊 三寸 乙 観音 二寸 丙 蔵像一寸 | 成都 文殊院 箱入 | 1,400文 | |
| 第6号 | 蔵仏 | 泥 平形 | 丈一寸 | 成都 | 文殊院箱入 |
| 第7号 | 観音 | 銅金箔 | 丈四寸 | 成都昭覚寺 | 1,200文 |
| 第8号 | 仏像画 | 長三尺巾二尺 | 廿八蔵仏鉢 | 成都喇嘛古寺 | 2,200文 |
| 第9号 | 同 | 長一尺巾九寸 | 馬上蔵仏鉢 | 成都喇嘛寺 | |
| 第10号 | 蔵仏 | 泥 平形円 | 丈二寸 | 喇嘛古寺 | |
| 第11号 | 釈尊 | 小像 泥 | 丈一寸 | 蔵来 | 喇嘛古寺 |
| 第12号 | 蔵仏 | 小像 泥 | 丈一寸 | 蔵来 | 喇嘛古寺 |
| 第13号 | 同上 | | | | |
| 第14号 | 蔵仏 | 王氏所贈 | 成都 | | |
| 第15号 | 峨眉山上金殿銅像 | 万仏之一 | 金殿處贈 | | |
| | | 明萬曆年中處造紫銅金製 | | | |
| 第16号 | 蔵仏 | 泥 丈二寸五分 | 絵貝付 | 炉刺麻寺 | |
| | | 二、三種 | 達拉釈尊七、八鉢 | | |

水野齊入宛書簡によると「成都ニテ西藏仏像数個蔵画2幅求メ又石摺等得候何レ便アラバ送付致ス心算ニ候」(M32. 4. 21)

荷物の整理	蔵仏第五号	甲 護身仏	1寸2分	銅箱入	文殊院
		乙 釈尊	2寸5分	銅箱入	文殊院

丙 蔵仏 2寸 銅箱入 文殊院

武侯祠にて「石硯武侯祠」(300 文)を購入(M32. 4. 21)。王氏より諸書した「団羽」と「蔵仏」をいただく。古志堂にて「印度雜記」、「成都図」(560 文)、「四川地図」(560 文)を求める(M32. 4. 22)。



四川省量台贈の扇子

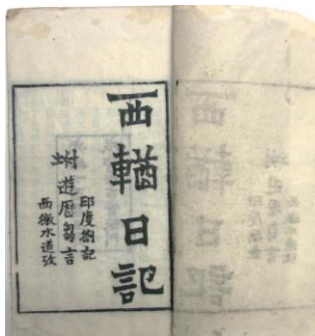


成都で入手した鳥虫書と武侯祠碑文(右)



水野齊入宛て書簡より「多クノ荷物ハ持行事不出来候間過半ハ当地ヨリ重慶へ持帰ラレシテ候右中ニハ各所ニテノ石摺十四、五枚皆有名ノモノ西藏仏十四軀西藏ニカンスル要書等モ入レ置候何レ便あり次第日本へ送ルツモリ」(M32. 5. 1)

「諸葛武侯(孔明)祠堂碑文」は、諸葛亮(181～234)字は孔明。山東省近南県の人。劉備の三顧の礼を受けて軍師となる。蜀王朝成立後、劉備の遺児劉禪を補佐しながら曹氏の魏王朝に挑戦しつづける。「武侯祠」は、諸葛孔明を祠る。成都の南郊2キロ、武侯祠大街231号にある。孔明は、名を亮といい、「三国志」で有名な蜀漢の宰相(総理大臣)である。「天下三分の計」を進言したことで有名。おくり名が武侯ということから「武侯祠」という。碑文の拓本は、大きさは、縦3.69m、横1.4m(約千文字の拓本)で、一世紀前の貴重な請来品である。



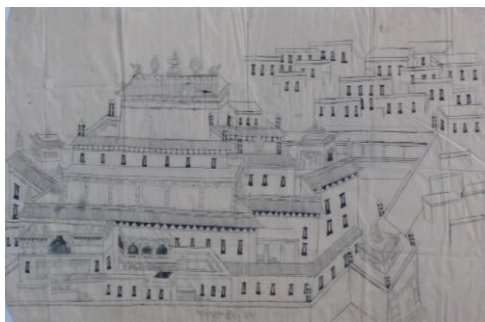
『西輜日記』M32. 4. 23 成都で入手(第4次探検コース書込)



「飛越関碑記」



タルチャー



テンギェリン寺のスケッチ模写



西藏小仏像(木箱入)



将来品の西藏文経典

「ラマ経」17冊(10 銭5 厘)、手帳12冊(2 銭5 厘)、(M32. 7. 3)。

御尊父宛書簡より「在重慶ノ井戸川大尉ニ頼ミ京都下珠数池田屋迄三個荷物持帰り依頼致候(皮カバン、竹行李一ケ、油紙包一ケ)好便ノ時ハ国元へ御取寄ヲ乞フ」(M32. 7. 5)とあり、京都池田屋から浄蓮寺へ取り寄せるよう依頼している。この荷物に納められている将来品は現在、浜田市金城歴史民俗資料館へ寄託展示されている。

井戸川氏帰朝持帰り分(M32. 7. 7)

朱氏を通じて、麻布包

「蔵仏泥」 八軀 「観音」 七軀 「蔵文經典」 十六部(小冊)

「蔵寺用風鈴」 一握(金製) 「木塔」 蔵殊 一連 「五台山殊」 一連

「針口子」 見本(数ケ)

「日記帳」 4冊 「第四号(語学)」、外に1冊、「第七号(成都間日記)」、「31年日記」。

「金剛經」完全版小冊 57葉(炉版)乙第弐号を求める(M32. 10. 10)。刺麻寺三ヶ寺で「御經」5,300文(M32. 10. 29)。「御經」二部 14両(M32. 10. 30)。「西藏図考」1,100文(M32. 11. 2)南條氏へ送付。



西藏仏像(泥製)

【西藏經典目錄】^{注5} ※南條氏宛て書簡より

- 第1号 賢却經上卷 220葉 金銀水写字 大本
- 第2号 同上 下卷 238葉 金銀水写字 大本
- 第3号 賢却千仏名經一部 358葉 版本 大本
- 第4号 南無三寶教師法王蘇隆贊甘普作 240葉 金銀水写字 大本
- 第5号 ウルゲン語上卷 255葉 金銀水写字 大本
- 下卷 186葉 金銀水写字 大本
- 第6号 聖金光明之帝王大乘經 221葉 金銀水写字 中大本
- 第7号 八千般若上卷 204葉 金銀水写字 大本
- 下卷 200葉 金銀水写字 大本
- 第7号2 金剛(訳文) 25葉 金銀水写字 大本
- 同附甲 能金剛般若波羅密經 25葉 金銀水写字 大本
- 同附乙 普明 270葉 21葉缺 金銀水写字 大本
- 第8号1 滅十罪經歟 180葉 金銀水写字 大本
- 同2 滅罪經 12葉
- 同3 南無三寶、諸仏来往、 25葉



ウルゲン語經典



同 4 同上 30 葉

同 5 無想經 7 葉

第 9 号 1 千手觀音畫像巻幅 大 ※丈 2 尺 5 寸 巾 2 尺 (M32. 10. 28)

同 2 蓮花菩薩畫像巻幅 小 ※縦横 8 寸 (M32. 10. 28)

以上自第 1 号至第 9 号、寺本君に托し尊師御元へ送付仕候間御預置奉願上候也。(M32. 11. 7)

明治 33 年 4 月 16 日、京都にて寺本婉雅氏より南條氏が受取り自宅で保管中の物と 33 年 1 月 16 日、原田鉄造氏持ち来る諸品在中の紙函 1 個とを記念物として、能海静子氏に引き渡した。(M38. 7. 29)。南條博士は、築地本願寺において能海寛の追弔悼法会 (M38. 7. 26) を終えて、形見分けの形で能海寛の妻静子氏へ譲渡したものである。

「泥釈尊像」35 文 (M32. 12. 3)。「鉢麻三婆瓦」の画 (M32. 11. 7) を得る。「釈尊画軸」400 文、「蔵小太鼓」200 文、「金剛經」購入 450 文 (M32. 11. 8)。乙第巻号「麻尼百千頌經 (蔵文)」御經一部 179 葉完全 4,770 文 (M32. 11. 9)。御經「金剛經」100 文 (M32. 11. 12)。「佛画」7 枚 2,100 文 (M32. 11. 14)。

「蔵仏」銅製、泥仏購入、「蔵仏 (蔵及び泥体)」、仏像代 1,000 文 (M32. 11. 17)。

「仏説大集母、逆子菩薩所用經」完全 128 葉、外に 119 葉 (3,180 文) を買い求める (M32. 12. 24)。泥釈尊像 35 文 (M32. 12. 3)。釈尊仏画 400 文、「蔵小太鼓」200 文購入 (M32. 12. 8)。仏画大幅一軸 800 文 (M32. 12. 9)。「仏像」2 軀 12,800 文 (M32. 12. 16)。「硯」7 個 1,200 文 (M32. 12. 20)。古仏画 2 軸 100 文、「仏画」1 軸 500 文 (M32. 12. 23)。「金剛經」600 文 (M33. 1. 15)。

「丙第五号」(M33 年・西藏国仏像集) は、明治 32 年 11 月 20 日より 12 月 16 日までの 26 日間をかけて、打箭鑪にてⅠ佛、Ⅱ菩薩、Ⅲ鬼神、Ⅳ鎮守、Ⅴ梵神、Ⅵ国神、Ⅶ人神の七つに分類して、40 体の仏像の模写とチベット語、仏像の概略説明を記している。この中には、能海寛の請来品の仏像である「ジャンバラ神」、「ミラレパ聖人」、「釈迦牟尼佛 (触地印)」も含まれている。

寛が日本へ将来した仏像三点が、このスケッチの中に存在している。「鹿苑ノ釈迦牟尼佛」、「ミラレパ聖人」、「ジャンバラ神」である。ジャンバラ神は、西藏人が最も信仰する仏像で、ミラレパが深く信仰していたと記述している。ミラレパは 1,038 年に生まれ 1,122 年に亡くなっている実在の聖人である。入手経路を見ると四川省ダルツェンドにて明治 32 年 11 月 17 日に釈迦牟尼佛一点、12 月 16 日にミラレパ聖人、ジャンバラ神の 2 点を購入した記録が残っている。

「ジャンバラ神」は、寛の記述によると「福神にして、大黒天なり。右手に袋。左手に蛇退治の具を持てり。西藏人の最常信心す。クベーラの形相にして、ミラレパ深く信仰せり。」と述べている。ジャンバラ神は、「梵神」に分類している。



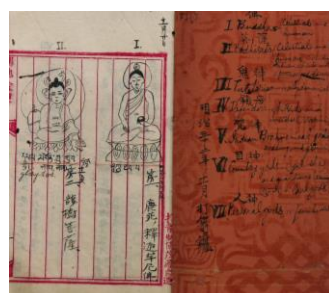
ジャンバラ神



釈迦牟尼仏



ミラレパー聖人



『丙第五号』(西藏仏像集)



滅十罪經典

能海志津子氏宛書簡より「昨年頃送り出しの荷物の事近頃よく問合せて見れば、皆上海の本願寺ニ預けある由 32 年ニ弐個(壺個ハ支那の竹籠。壺個ハ支那かばんと西洋かばん一とまとめ)。33 年ニ、三個(壺個ハ西藏經典、壺個ハ西藏仏像画、壺個ハ皮竹行李の麻布包ミ)。以上五個也。その内三個ハ錠をおろし置候。日本ニ持帰るニハ、一々中を見せねばならねども鍵がなきゆへ持返りにくき故上海ニある事なるべし。近頃上海別院の松林氏より好便あれば京都の池田屋宿屋へ届くると申来り候。右五個ノ外ニ小包壺個ト西藏經典沢山凡ソ二個半ハ南條先生へ預ケ置キ候ハ、小生帰国ノ上受取候。南條先生よりの手紙ニも已ニ届きたるよし通知有之候」(M33. 1. 21)

水野齊入宛書簡では、志津子宛て上記文面と内容が同じであるが、次のような追記がある。「…其外ニ小包壺個原田君方南條先生へ持帰へり預ケアリ又西藏經典ハ二荷斗り寺本君帰朝ノ時(M32. 11. 7)持帰り同シク南條師へ預ケ先生方正ニ預リ居ルトノ書面来タリ。」(M33. 1. 21)。

従って、鍵の掛かった荷物 3 個は、上海本願寺別院預かりとなった。この幸便とは、上海別院から原田鐵造氏の帰国時に持ち帰り、池田屋と南條氏へ手渡したものである。(M33. 1. 16)

「輪内釈尊画」600 文、「泥蔵仏」袋入り 100 文(M33. 1. 16)。皮帳 200 文を求める(M33. 1. 20)。「版本蔵経」入手 200 文(M33. 1. 22)。「観音來迎(蔵仏)」1 駄 470 文(M33. 1. 25)。「文特殊歌画幅」300 文(M33. 2. 5)。「帖」2 冊 140 文(M33. 3. 26)。「麻布一匹経」230 文(M33. 4. 4)。「書典」300 文(M33. 4. 6)。「仏画」六軸 7,800 文購入(M33. 2. 21)。「御経」、「仏画」六軸 4,000 文(M33. 2. 24)。



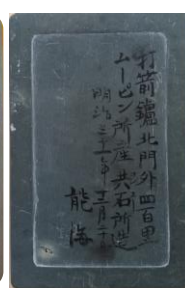
小太鼓



西藏帽子(赤帽)



ムーピン産の硯



西藏小仏像(泥製)



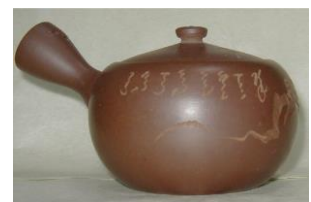
カンリン(骨笛)



ディブル



ムーピン産の硯



宜兴紫砂急須

菱州にてムーピン産の硯を求め硯の裏側に『打箭炉北門 400 里ムーピン所産共石所造』と墨書きしている(M31.12.20)。写真の 2 点の硯は、浄蓮寺に保管されていたもので、その他の硯は、兄弟などに手渡されている。

「宜兴紫砂急須」は、中国江蘇省宜兴市の源鉦泥を用いたもので茶葉の持つ、本当の味を十分に引き出すことや、暑い夏に急須の中に長く茶葉を入れていても腐敗しにくい、茶葉の保存性の高さなどで、宜兴の砂と技術は、歴代の上級階層の人々や文人が絶大な評価を得ています。

この急須は、三峡遡上中に求めたものである。急須の横側には、達磨絵とモンゴル文字が刻印されている。浄蓮寺檀家総代の植田忠三郎氏へ譲渡された。

モンゴル文字で書かれた記念物(機関誌『石峰』第 9 号の表紙写真に掲載)は、寛の妹初子に譲渡された。

小太鼓、西藏帽子、カンリン、ディブル、西藏小仏像などは浜田市金城歴史民俗資料館に寄託展示されている。

寺本婉雅宛て書簡より「近頃迄に仏像、經典、畫幅、求め来しも、今や淡々又持来もの有之候へ共最早金無之、残念見遁がし居り候」(M33. 3. 23)。

これまでに蒐集した仏典の翻訳に明け暮れている中、手持ち金子が乏しくなったことを寺本へ伝えた書簡である。これ以降の仏典などの蒐集記録が減少していることが記録から判断できる。

金剛經 57 葉、訳本 4 冊(「般若心經」、「無量壽經」、「弥勒菩薩誓願經」、「金剛經」)^{注6}を南條氏へ小包で発送する (M33. 5. 4)。

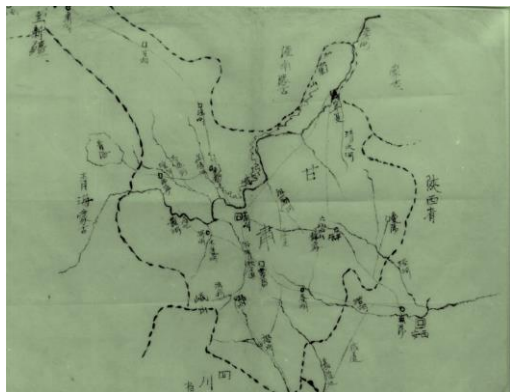
いち早く、恩師南條博士宛て小包で翻訳した 4 經典を届けた。(『能海寛遺稿』115p) 南條氏は、この翻訳物をどのように活用されたのかは不明であるが、『能海寛遺稿』には「某月某日南條の許に達せり」とのみ記され翻訳の評価の記述は一行も掲載されることは無かった。幸いにも、『般若心經』のみ、掲載発表された。もしも、他の 3 經典の翻訳が刊行されていたら能海の評価も上がっていただろうと思われる。南條宅は、昭和 20 年 3 月の関東大空襲で自宅や書庫が全滅しているから、能海が将来した文献の欠落している部分が失われたことも考えられる。

本山上申書第十九回、本山寺務所布教局宛の追啓に「小生先月及今月モ荷物重慶止送り置候多分幸便モ無テ小生帰朝迄ハ届カザルベキモ一寸通知致置候。仏画等廿七幅壱包十五斤(7.5Kg)。西藏經文三大部壱包、三十五斤(17.5Kg)。皮行李壱包六十斤(30Kg) 仏像、經卷、仏具、書類。又当地ニモ銀百拾兩余ト荷物六十斤(30Kg) 斗り当主天主堂の朱徳喜氏ニ預置ク。昨年口ト共ニ八個相成其の内寺本持帰ノ經文二荷凡百五十斤(75Kg)ハ南條氏ニ預置様たのミ置タリ。天主堂朱徳喜氏ニ預ケ置キ出発スルハ小生再回炉ノ節用スル品也。」(M33. 5. 16)

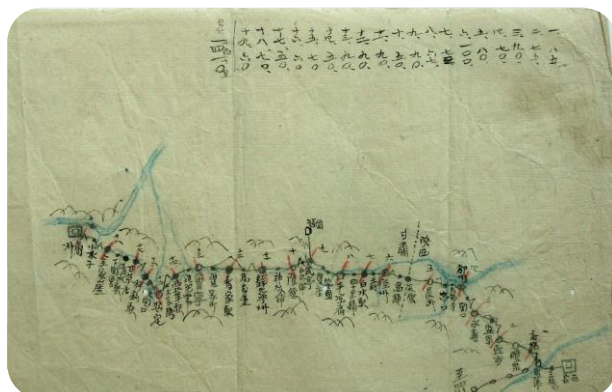
皮行李の荷物こそ、上海の木櫃(水牛の皮張り)^{注7}の第二次発見時の品物と考えられる。

II 第二次探検行での蒐集品

打箭炉—稚州—成都—徳陽—劍—千仏崖—漢中—留覇—陽岐—武功—西安府—長武—平京—蘭州—平番—西寧—タンガル—冬科爾—タンガル—循化—狭道—階周—臨江—順慶—重慶



能海寛手書き「甘肅省の地図」



西安府～蘭州間の行程記録が記された地図

ラマ帽子(黄色)240 文で購入(M33. 5. 5)。5 月 17 日、打箭炉を發って、西安府へと向かった。能海寛が「黄帽」を求めたのは、15 世紀初めころ、ツォンカパと呼ばれる僧が現れて、ラサの東方

40kmの地にガンデン大僧院を建て、ゲルーあるいは黄帽派ともいわれる一宗を開いたことで黄帽の聖地青海省へ向かうための対策でもあった。

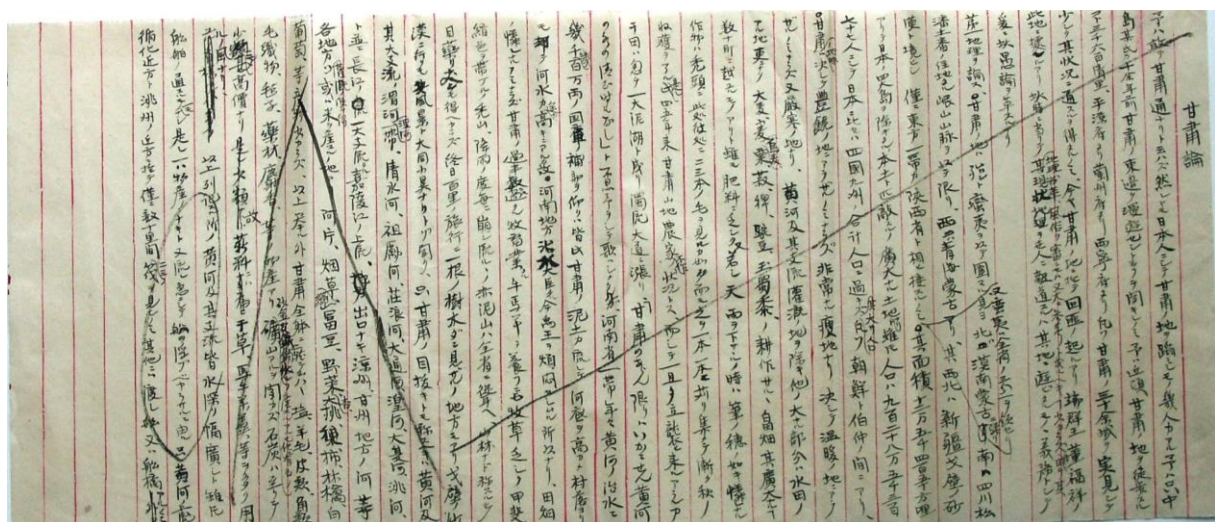
能海寛は蘭州から故郷の友人宛に4種類の種子を送付した。現地の気候と故郷の気候が似かよっているので、栽培してみたらと送付している。結果的には、栽培されずに現在まで保管されている。種子を包んだ和紙にそれぞれ次のように墨書きされている。

- 「菽米」寒冷地に適す。甘肅ニハ米又少シ故ニ此菽米ヲ以テ餅米ノ代トナス。甚粘着力強ク餅米ト異ラズ。餅又ハ酒ヲ造ル。蘭州ヨリ尚西北最多。
- 「洋麦」寒冷地ニ作ル。鳥麦ノコトナリ。甘肅一帯多ク作ル。麦ニ三種アリ。1.「大麦」通常麵又ハパン作り。2.「青稞」麦粉トシテ食ス。3.「洋麦」粉トシテ食ス。
- 「甘肅胡麻」甘省ハ寒地ニシテ通常ノ胡麻ヲ見ズ。只見ル此草ノ如キ胡麻甚多キ西寧地方最多。
- 「平豌豆」甘肅安定県辺最多。人ノ食スル所、通常ノ豌豆ハ皮カタクシテ人食ニ適セズ、馬糧トス。



打箭炉発・水野斉入宛書簡より「小生当地及西藏ニテ西藏經文数部相求メ候。何レモ金銀水ヲ以テ贖致セルモノニテ式百目斗リ相求候。寺本ニ托シ南條師同元へ預リ置願出置候。本年夏、支那カバン、西洋カバン共壹纏壹個、支那竹行李一個、麻布包壹個、以上三個 井戸川大尉帰朝ニ托シ池武宛(池田屋の略称?)送置候。届キシヤ否。右ハ幸便次第国元へ御取り寄セ置口依願候。」(M33. 11. 8)

「支那疆域沿革略説」を求める(M33. 12. 12)。「蜀放」8冊、「蜀水攷」2冊(M33. 12. 15)。「入蜀記」、「吳船録」、「天下里程」を求める(M33. 12. 17)。



「甘肅論」の下書き原稿(本山宛て原稿 11 枚を郵送した。(M34.2.20)

「甘肅論」注⁸は、本山宛て 11 枚の原稿を送付している。能海の書き残した下書き原稿で見ると、諸言。第1, 地理を論ず(省界、人種、面積・人口、水辺及び地味、物産、交通、三大府、里程、

気候)。第2, 風俗を論ず(家屋、土城、衣服、番人、回々、食物、商業外国品、通貨及舛、物価)。第3, 甘肅の沿革。第4, 宗教(回教、仏教、道教、喇嘛教、耶蘇教)。第5, 省治の規模(府督、總督、城小、官大、統計)。第6, 甘肅と新疆の關係及青海(甘肅・新疆の關係、青海の風俗と西洋及西藏人種の範圍、日本と此地方、青海の光景)。などが集録されている。

この「甘肅論」は、第二次探検中に体験・見聞した論考である。タンガルでの盗難事件^{注9}に遭遇しなかったならば、青海省から南下してラサに到着していたかもしれない。

「新疆蒙古及び青海見聞概記」明治33年11月9日付、によると「余は、西寧に於いて青海進蔵の準備を整へ、タンガルに至るや、直ちに単独青海に出発せし所、此地にある支那人引き留め、到底三人や五人にて横断することの出来ざる旨を語れり、由て暫く留まり、土人を雇ひ、騎馬にて四日間をかけ、一度青海内地探検に向かひ、原野を互り、山高(巴圓)を越え、福海寺、大道寺、冬科爾、哈拉庫圖爾等に至る。此地方支那寺一もなく、悉く喇嘛寺にして、打箭炉内地と異なることなし、塔爾寺の如きは三千六百の喇嘛あり、胡圖克圖、即ち活佛ありて、蕃子の信仰最厚し、圓形黒房、牧畜、牛乳、パン等西藏地方と大同小異なり。」と塔爾寺を訪問した内容も記されている。

明治33年12月2日付、寺本婉雅宛て書簡に「青海の内地は全く放任しあり、一大成吉思汗傑起せば亜細亜中原の王と成る易々たるの業のみ、此闇黒の地は何の日にか世界に紹介せられん。青海内地又喇嘛寺多く予の見たる福海寺大道寺、冬科爾寺など皆数百の喇嘛あり、「タルスー」の如きは三千六百の喇嘛あり、西藏佛教の版圖の廣大なる、流石は大陸的教なる所、小嶋人のうらやま敷の至には不堪候。」とある。

Ⅲ 第三次探検行での蒐集品

重慶—貴陽—安順—赤資曲靖—雲南—安寧—廣通—迨州—大理府—麗江—中甸？

北貴陽府で「黔南識略」6冊を購入(M34. 3, 9)。大理府にて「緑ターラ石板仏」、「大理石版」(雨餘更新清)を購入(M34. 4, 18)等の荷物を従僕へ托して重慶へ帰らせ、単身で翌19日、大理を出発し鄧川へと向かった。鄧川より4月21日付、能海静子宛て書簡が最後に音信となった。



『黔南識略』(6冊購入)



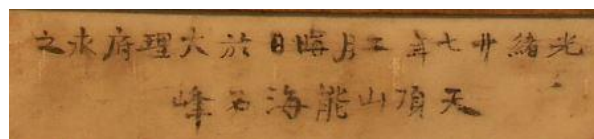
緑ターラ石板仏



石板額(大理石)



石板仏の裏面刻印



石板額裏面の書き込み

「緑ターラ仏」は、大理府で求めたもので、石版仏である。裏面に西藏文字が刻印されており、「新 舊 意」とは、一般的に開光儀礼の時、仏像や仏画などの裏にかかれるもので、「心・口・意」を意味するという。

「大理石板額」は、上側面に山水画風の模様のある大理石で、画面左上に「雨餘更新清」仲春^印とある。下側面には、「田園樂七首之六」王維詠六言絶句の漢詩が記入されている。

桃紅復含宿雨 柳緑更帶朝煙
花落家童未掃 鶯啼山客猶眠
雲隈 ^印

この石板の裏書に「光緒廿七年二月晦日於大理府求之、天頂山能海石峰」とあることから明治34年4月18日に大理府で求めたとある。恐らく、能海寛の最期の蒐集品であったと思われる貴重な逸品である。

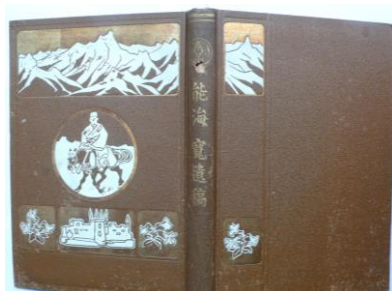
明治32年3月27日付南條氏宛て書簡で「在重慶井戸川大尉は同書生原田氏を同道、不遠之内、成都、打箭炉、雲南、貴陽へ旅行之筈等に御座候。」と井戸川氏と原田氏の行動予定が記されている。能海の第三次探検コースと一致している。

『能海寛遺稿』（大正6年刊）原田鐵氏（鉄造ともいう）の寄稿の「横死訛傳の鞭明」に「廿六年夏余も亦雲南に遊び路大理府を過ぐ。一夜客舎に投じ、其破壁の間に我国風一首を見出す。墨痕淋漓たるものあり、此家は嘗て師が宿泊せることあるあるを聞きたれば、余は此壁間の家に対して仰情に勝ふる能はず紙を伸ばして之をすき写しになし、笈に納め収めて持ち帰りたり、而かも師が消息は今に至て些も得る所なきなり、貴紙上の記事「廿六年十二月伝々、又師が其遭難に際し、壁間に題し、大日本石見国伝々」の如きは、或は此に出たる世の訛傳に非ざるなき乎。」（大阪毎日新聞38年8月12日所載）によると、井戸川氏からの訛傳発信源ではなかったことが、この記述から理解できる。原田氏が明治36年夏に遭遇したとするならば、能海は明治34年4月下旬以降に音信を断っているので2年間の空白がある。距離・位置的に考えると34年末までには横死したと考えられないだろうか。或いは、一泊した民家に痕跡を残して、更に進蔵したことも考えられるのである。更には、建築家の伊藤忠太博士一行が雲南奥地からビルマへ向かったルート上に能海寛の探検コースとクロスした地点なども調査する必要がある。

原田氏は能海と4回の出会いがあった。最初は、東京の宮嶋大八氏の主宰する詠帰舎で中国語の研究の時。2回目は31年冬に四川省で再会。3回目は32年6月打箭炉で再会。4回目は33年11月4日青海省から喇嘛僧姿で重慶の原田氏を頼って帰還し、3か月間静養した。そして、34年2月、能海は雲南へ向かったのである。公私ともに交流があり、能海の仏教探検を陰ながら支援してきたことが判かる人物である。



真宗大谷大学での17回忌追悼法会記念



『能海寛遺稿』（大正6年刊）



能海寛(在重慶)

明治 38 年 10 月 1 日上海別院に於いて、物品照合の上寺本婉雅氏が本国へ持ち帰ったもの。注 10

1. 斜子地織 1 枚 袴 1 枚 白衣 1 枚 夜具 1 枚 地図 3 冊 雑書及び書類

以上 白色支那袍在品

2. ズック外套 1 個 獣皮 1 枚 白毛布 1 枚 紅色下着 1 枚 合羽 1 枚 地図 1 枚 木碗 2 個 金盃 1 器 白衣 1 枚 黒衣 1 枚 輪袈裟 1 領 支那扇 1 本 念珠 1 連 小倉帯 1 筋 帽子 1 個 硯 1 個 秤 1 個 書類包 1 束 茶碗 1 箇

以上 黒色支那在品

3. 靴 1 足 拓本 1 巻 團扇 2 個 地図其他書 類草鞋 2 足 縞羽織 1 枚 白衣 1 枚 袷 1 枚 布衣 1 枚 仏像軸 1 陶器懸額 1 枚 辞書 1 巻 真宗寶典其他 1 冊 書冊 1 包 打鳴鐘 2 個 硯 7 個 念珠 1 連 支那帽子 1 個 袈裟 1 個 黒衣 1 領 差拔 1 着 手厘 1 箇

以上竹製「カワゴ」在品

4. 縹帶木綿 1 筋 書類 1 包 仏像 13 軀

以上古皮子在品

5. 竹「カワゴ」在中、手厘在品目録左の如し。

馬蹄銀 2 個 腕環 1 個 時計 1 個 古財布 1 個 銅器 3 個 「ガラス」 1 個 小仏像 21 軀 墨西哥銀 2 弗 同 1 弗 同 1 弗 日銀 50 銭 端書 1 束

以上

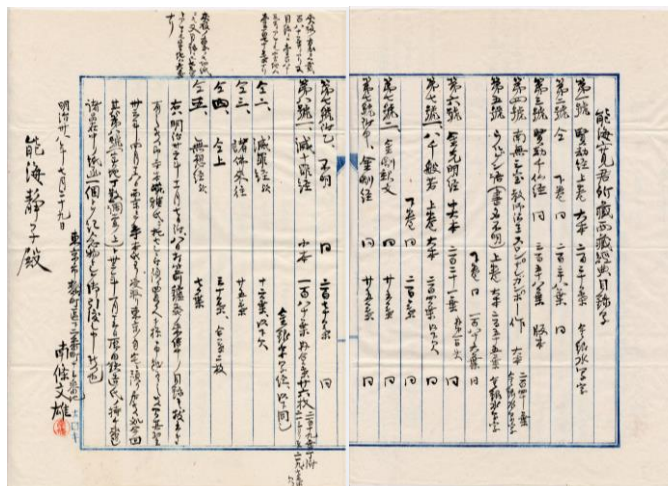
IV. 能海寛の上申書等に見るメッセージ

南條博士が能海寛の遺品を郷里、大谷大学、哲学館へどの様な意図で振り分けたのか、検証することが能海寛の意志を解明する事に繋がるものと考え。能海は、無事帰還したならば、南條博士に保管を依頼していた将来經典を受け取り、故郷で外国人も受け入れて仏典翻訳学校注 11 を開設して英訳經典の翻訳研究に活かそうと考えていた。

恐らく、南條博士は郷里へは仏典関係。真宗大谷大学へは、仏像・仏画を振り分けたのではなかろうかと考えられる。

明治 38 年 7 月 29 日付、南條博士から能海静子氏へ「能海寛君所蔵西藏經典目錄写」により、譲渡された。この經典は能海寛が仏典研究で必要不可欠の品であった。

しかし、あるべき經典が浄蓮寺では欠落しているのである。寺本婉雅氏と能海寛の実弟の水野齊入の往復書簡を調査した際に、大正 6 年 5 月 20 日に真宗大谷大学で開催された「能海寛 17 回忌追弔法会」注 12 において、河口慧海氏の記念講演、能海寛遺品展が同時に行われた。開催に当たり、寺本氏から水野齊入氏へ能海の記念物の展示出品依頼が要請されたことが記されている。この時に、現在欠落している經典(ウル



南條博士から能海静子へ譲渡された「西藏經典目錄」

ゲン語經典・賢却經など)が浄蓮寺から大谷大学へ貸し出されたものと思われる。

南條博士は、能海の遺品を譲渡する場合には、必ず書面(譲渡目録)で確認して譲渡しているが、大谷大学博物館に所蔵されている能海寛将来品については、今一明確ではないのである。本来は、南條博士からの譲渡リストが残されていると考えられるので、精査研究され、収蔵リストを作成して、一般公開をされることを希望するものである。能海が命がけで巡礼探検して、蒐集して請来した、能海の求道の精神を理解いただきたいものである。

大谷大学博物館(旧図書館)へは、過去3回訪問している。「能海寛師顕彰碑」を建設するため、昭和57年3月、能海寛顕彰会(小森会長、岡本副会長、隅田事務局長)3名が、能海寛将来品を調査に伺った際には、僅か2点のみの現存として扱われた。能海寛の将来品の經典を眼にすることはなかった。

その後、能海寛生誕120年に当たり、金城町歴史民俗資料館で特別展「能海寛生誕120年記念」に大谷大学博物館から学芸員1名が来館された。その際に詳細の話をして、再度の確認調査を依頼した。その結果、昭和63年9月8日—24日、開催の「能海寛生誕120年記念展覧」が開催された。この時の「展覧リスト」によると29点の展示会で詳細な經典名表記はなかった。

2回目の訪問は、平成7年9月9日に能海寛研究会(平成7年1月結成)の研修旅行先が大谷大学博物館であった。会員23名で訪問して、能海寛将来品の經典15点がテーブルの上に金銀水で描かれた經典が並べられたものを閲覧した。經典リストなどの説明は特になされなかった。

3回目の訪問は、『能海寛著作集』の出版に当たり、大谷大学を訪問して、学長、博物館長に出版経緯を説明して、博物館所蔵の能海寛著『第七号』(重慶成都間日記)、能海寛発信の「水野斉入宛書簡綴」などの収載のための協力要請と写真撮影を依頼した。編集者である能海寛研究会から正式依頼したものの回答は、出版社のうしお書店へ行われた。村上護氏の『風の馬』取材の際には、全点コピーが許可されているのに、能海寛の故郷から要請することへの対応が紳士的でなかった。

『飛越関碑記』に記されている能海の記述表現から学ぶものがたくさんある。明治32年5月1日、峩眉県草鞋市街から5月12日、打箭鑪までの750里を工程図に詳細に記録している。この工程記録は、タテの罫線に中央部に横線を引き都市、街、村の名を大きさに区別して、記号の下部に都市名を書き、河川、戸数、地形、産業、特産などや僧院の規模、西藏經典の有無を記録している。上部には、日時、発着時間、山の地形図と標高など詳細に記録している。特に、罫線一行分は中国の10清里として記録している点に注目したい。この手法が、第二次探検の『進蔵朝佛記』にも取り入れられている。

能海が2年5カ月間、身命を賭しての巡礼探検中にせっせと記述して。本山へ24通の上申書を送付している。その他、一定期間を区切り第1期～第5期上申書もある。私たちが目にするものは能海が下書きした上申書と弟の水野斉入が仲介して上申書を書き写した書類のみである。

第15信(M34.2.20)上申書によると「昨年五月本山宛に送り置候金剛經、般若心經、外二部西藏經文直訳御覽被成下候哉如何、御尋申上候…」M33.5.4付で南條博士宛送付している訳経に対するコメントが無いため再度伺っている文面である。しかし、『能海寛遺稿』195pの「重慶府発程の告別」の稿の中にカッコ書きして寺本婉雅の記述があることが気かりである。「昨年五月本山宛に送り置候金剛經、般若心經、外二部、西藏經文直訳御覽被成下候哉如何。(寺本曰く、般若心經以外の訳経の稿本は紛失せり、惜しみて余りあり)。」と記述されている。結果的には、「無量寿經」、

「弥勒菩薩誓願經」、「金剛經」の英訳經典は陽の目を見ることが無かったということである。

今日でも、117 年前に能海寛が取り組んだ仏教の世界的バイブルとなる英語訳の經典出版の精神が受け継がれて、世の中に出版されていないのが現状である。

【本山上申書発出データ】

回数	差出日	発出元	回数	差出日	発出元	回数	差出日	発出元
1	M31. 11. 18	上海	9	M32. 5. 1	峨眉県	17	M33. 1. 7	打箭炉
2	M31.11.30	漢口	10	M32. 5. 13	打箭炉	18	M33. 2. 25	打箭炉
3	M31.12. 4	宜昌	11	M32. 5. 28	打箭炉	19	M33. 5. 17	打箭炉
4	M32. 1. 13	重慶	12	M32. 7. 7	打箭炉	20	M33. 7. 28	蘭州
5	M32. 2. 4	重慶	13	M32. 7. 14	河口	21	M33. 11. 9	重慶
6	M32. 3. 30	重慶	14	M32. 7. 29	裏塘	22	M33. 12. 27	重慶
7	M32. 4. 14	成都	15	M32. 8. 19	巴塘	23	M34. 1. 1	重慶
8	M32. 4. 22	成都	16	M32. 12. 12	打箭炉	24	M34. 1. 17	重慶

『能海寛遺稿』239-241p 掲載・南條博士寄稿によると「…以前でしたか学習院の某教授が能海君の書翰に依って恰もかも能海君が書いたやうに紀行を書いて出版したいからといふので、お貸したこともあります。…」（中外日報紙・T5. 10）。

この文面と関係すると考えられるのが、能海寛から南條博士宛て書簡は、全部で 16 通届いているが、第九信 (M32. 11 落手)、第十信 (M32. 12. 17 落手)、第十一信 (M33. 1. 16 落手) の 3 通の書簡が紛失しているという（『能海寛遺稿』96-99p）。本来ならば、打箭炉へ留まり、仏典翻訳の状況報告を南條博士に伝えていたことが考えられる時期であったので、非常に残念なことである。

この稿に取り上げた能海寛の将来品は、本国に届いてから方々へ四散したと捉えるべきか、散逸したというべきであろうか。こういった事象から鑑みて、南條博士の意志を受け継ぎ身命を賭して、チベット探検に赴いた能海寛の行動は「非常に残念」、「報われなかった」との言葉のみでは解決されない重要な問題が隠されている。

注 1 『能海寛著作集』第 12 巻 548p 掲載の上申書(下書き原稿)に中国で体験した 3 つの苦難(通貨、言語、交通)を詳細に記述している。

注 2 「西藏図考」(全 6 冊セット)は地理誌で、能海は 2 度購入をしている。最初は重慶 (M32. 2. 2) で求め、2 度目は M32. 11. 2 に『西藏図考』1, 100 文を買い求め南條博士宛て送付している。

注 3 「能海寛直筆西藏地図」は、M32 年 6 月、重慶滞在中に 3cm 方眼の用紙に頭蔵、前蔵、後蔵の河川、地名、道を詳細に描いている。

注 4 重慶で撮った 3 人の写真は、甥の能海法恵が真宗大谷大学生として在学中に、寺本婉雅氏から要請を受けて、法恵が郷里の父法言へ依頼しアルバムから剥がして、送付された 1 枚である。この写真は返還されていない。

注 5 「能海寛君所蔵西藏經典目録写」は、南條博士が、能海寛忌追弔法会を終えて、能海寛の形見分けの形で、明治 38 年 7 月 29 日付で、能海静子(当時上京中)へ、ここに掲載の經典を直接譲渡された書面である。

注 6 能海寛が翻訳した 4 經典は、サンスクリット、西藏語、英語、日本語に対訳したものである。

- 注 7 上海の木櫃は、木箱の外側に水牛皮が施されているもので、平成 8 年 11 月 10 日に浄蓮寺本堂裏の書庫から発見された。『石峰』第 4 号・40—41p に詳細を掲載。
- 注 8 「甘肅論」は、能海寛研究会機関誌『石峰』第 4 号(1997. 7. 20)活字版で収載。第 2 回探検時の甘肅省、青海省地方の見聞記。
- 注 9 タンガルでの盗難事件は、能海が旅行荷物をタンガルの宿に預けて、冬科爾地方へ西藏行きの商隊の情報収集に出かけた留守のできごとである。この時、金子も盗まれ 2 次探検を断念した。
- 注 10 寺本婉雅が明治 38 年秋、西藏から帰朝の際に、上海東本願寺別院に立ち寄り能海の旅行遺物を日本に持ち帰った。
- 注 11 明治 23 年 2 月～3 月にかけて、学問成就の暁には仏教大学を故郷に設立する構想を持ち、漢籍、仏学、英学、普通学、仏典翻訳の 300 人程度の学校建設計画を記している。
- 注 12 「能海寛 17 回忌記念法会併記念講演会」は、大正 6 年 5 月 20 日に真宗大谷大学内能海寛追憶会主催で開催された。

【使用文献】

『能海寛遺稿』能海寛追憶会刊(T6. 4. 25)。

『能海寛著作集』第 1 巻—第 15 巻(H18—H22)。

浜田市金城歴史民俗資料館寄託収蔵品(能海寛歴史資料)。

能海寛研究会機関誌『石峰』収載

- ・「能海寛生涯日録」(『石峰』第 25 号・2020. 3. 15)。
- ・「水野斉入あて書簡(大正 6 年)を巡って」(『石峰』第 16 号・2011. 3. 15)。
- ・「水野斉入宛て書簡に見る『能海寛遺稿』の出版経緯」(『石峰』第 24 号・2019. 3. 15)。



浜田市金城歴史民俗資料館・能海寛歴史資料